

清末の主要な文学期刊誌の発刊詞における 小説概念

白 須 留 美

1. はじめに

中国では民国期に入ると鴛鴦蝴蝶派と呼ばれる一群の作家たちが文学期刊誌や新聞で活躍する。彼らの作品は、近代的な小説の概念に近く、様々な趣旨の小説を刊行した。しかし1919年の五四運動時期に新文学派より強い批判を受けた彼らは、次第に活躍の場を失っていった。それでも、彼らは新たな発表の場を模索し、作品の開拓を行う。彼らの作品は娯楽作品が多く、30年代後半からの第二次世界大戦、国共内戦において作品はほとんど発行されなくなり、49年の中華人民共和国成立以後、鴛鴦蝴蝶派はほぼ消滅してしまった。

鴛鴦蝴蝶派は、清末から民国期の数十年という短い期間であるものの多くの作品を発行した。娯楽小説を多く輩出した彼らはどのような文学概念を持っていたのか。それを見るには清末の文学概念を知る必要があると考える。清末の主要な文学期刊誌である、『新小説』『繡像小説』『月月小説』『小説林』の四誌の発刊詞を見ることで文学概念の変遷の一端が見られると考える。そしてこの変遷を見ることは、民国期以後に現われた鴛鴦蝴蝶派が、いかにして起ったのかその過程の一因が見られると考えるからだ。

清末に芽生えた小説の価値への高まり。その価値に注目した梁啓超を起点として、彼が与えた影響力の強さは見過ごすことはできな

い。そしてそれに傾倒する人々がいる一方で、そうした小説観に反発した人々もいた。

中国において小説という言葉自身は古くからあるが、ここでいう小説とは西洋思想の影響を受けた古典とは異なる近代的な小説のことである。清末はこのような新しい小説に対する概念が芽生えたばかりであり、それがどのような価値・意義を持っているか曖昧な時期でもあった。その曖昧な時期にどのような小説観が垣間見られるのか、上述の文学期刊誌の発刊詞から見ていく。

1. 1. 問題の所在

清末の小説を見る時に必ず目を通すのが阿英の『晚清小説史』である。これによると、清末の小説が最盛期を迎える要因に以下の三点挙げている。

第一、當然是由於印刷事業的發達，沒有前此那樣刻書的困難；由於新聞事業的發達，在應用上需要多量的產生。

（言うまでもなく印刷事業の發達により、以前のように本を出版するのが困難ではなくなったことと、新聞事業の發達によって実用上（小説の）大量生産を必要としたこと。）

第二、是當時的知識階級受了西洋文化的影響，從社會的意義上，認識了小說的重要性。

（当時の知識層が西洋文化の影響を受け、社会的意義から小説の重要性を認識したこと。）

第三、就是清室屢挫於外敵，政治又極腐敗，大家知道不足與有為，遂寫作小說，以事抨擊，並提倡維新與愛國。⁽¹⁾

（清朝はたびたび外敵に屈し、その上政治がまた腐敗しきり、知識人は（政府に）期待する価値がないのを知り、そこで小説を書

いて糾弾し、一斉に維新と愛国を提唱したこと。)

第一における新聞事業の発達による小説の大量生産を必要としたことから、小説が多く掲載されていたことがわかるものの、それが小説の大衆化、通俗化による小説の高まりとははっきりと示されていない。ここで述べる大衆化とは、梁啓超によって一度高められた小説の価値やその理念とは違って、広く一般の人々が興味を持つ小説を言う。また、阿英は清末小説の特徴として以下のように述べている。

但幾乎是全部的作家，除掉那極少數極頑固的而外，是有着共通的地方，即是認為除掉提倡維新事業，如興辦男女學校，創實業，反一切迷信習俗，和反官僚，反帝國主義，實無其他根本救國之道。⁽²⁾

(しかしほとんどの作家は、ごく少数の保守的な者を除くと、ある共通点がみられる、それは維新の事業を提唱し、男女の学校を開設し、実業を創設し、一切の迷信や風俗に反対し、官僚主義、帝国主義に反対する以外に、その他の根本的な救国の道はないとしたことである。)

如受西洋小説及新聞雜誌體例影響而產生的新的形式，受科學影響而產生的新的描寫，強調社會生活以壓殺才子佳子傾向，意識的用小説作為武器，反清，反官，反帝，反一切社會惡現象，有意無意的為革命起了消極或積極的作用，無一不導中國小説走向新的道路，獲得更進一步的發展。⁽³⁾

(【清末の小説は・筆者補】西洋の小説および新聞雑誌の体裁の影響から、新しい形式が起き、また科学の影響から、新しい描写が起きた。社会生活を強調して才子佳人の傾向を押しつぶし、意識的に小説を武器として用い、反清朝、反官僚、反皇帝、一切の社会悪の現象に反対し、意識的無意識的に、革命のために消極的

あるいは積極的な作用を起こして、中国の小説を新しい道に向かってすすむように導かせ、さらに一步進んだ発展が得られた。)

これを見る限り、阿英は、当時の作家達の共通認識には救国の道が根本にあり、小説はそのための武器であり、多かれ少なかれ革命に影響を及ぼし、その為の手段としたという見解であったことが伺える。では清末には近代的な小説の概念に沿った小説は中国においてはあらわれなかったのか。清末の中国において小説の地位を高めるために、小説を手段または武器と捉えたことは否めないが、小説の地位向上は当時の知識人に小説とは何かを考えさせる機会となったであろう。

もう一方で民国期に入ると“鴛鴦蝴蝶派”と称される一群の作家達から近代的な小説の概念に近い作品が現われる。彼らは様々な題材を取り上げ、小説の幅を広げるが、その作品は主に大衆小説に分類される。彼らに対して阿英の評価は高くない。かつて鴛鴦蝴蝶派の存在は無視されていた時期が多年に亘っていたが、近年は研究が進められ数多くの関連文献が出版されている。この鴛鴦蝴蝶派の定義は難しく、才子佳人の悲恋小説から、社会小説、武侠小説など広範囲に亘っている。名称については 1920 年頃に現われたとされ、魯迅が使ったことから広まったとされている。この民国期に全盛期を誇った鴛鴦蝴蝶派をいかにして現われたのか。その出現過程には、清末から始まる小説への高まりが関係している。本稿では、鴛鴦蝴蝶派が現われる前の清末の小説の流れを整理し、清末にいかなる小説観が現われたのか、それを探ることを目的とし、清末の主要文学期刊誌である『新小説』（1902）『繡像小説』（1903）『月月小説』（1906）『小説林』（1907）の四誌の発刊詞を中心に、発刊詞から見える小説に対する意識とその変化を見ていくことが民国期の小説へと繋がると考える。

2. 手段としての文学期刊誌

清末小説の出版は主に文学期刊誌や新聞に掲載された後に刊行されていた。小説への意識とその転換を見るには文学期刊誌及び新聞についてみていく必要があると考える。清末は、多くの文学期刊誌が刊行された時期であり、その中で主要な期刊誌として『新小説』（1902）『繡像小説』（1903）『月月小説』（1906）『小説林』（1907）の四誌が代表的な期刊誌としてあげられる。まず1902年に創刊された『新小説』は当時の知識人に大きな影響を与えたことは周知のことである。本節では、『新小説』を皮切りに、1902年～1907年の短い期間で小説概念がどのように変遷していくのかを見ていく。

2. 1. 『新小説』

『新小説』は、1902年11月横浜にて創刊された月刊誌である。発行所は、新小説社。印刷所は、新民叢報活版部。編集兼発行者は趙毓林とあるが、実際には梁啓超主宰の期刊誌である。創刊号～十二号（1903年11月）までは横浜で刊行されが、十三号（1904年2月）からは上海廣智書局に移って発行された。以後1906年1月に停刊を迎えるまで、全24号を刊行する。

『新小説』の創刊について、梁啓超は「新中国未来記」（『新小説』）の諸言において以下のように述べている。

一、余欲著此書。五年於茲矣。顧卒不能成一字。況年來身兼數役。日無寸暇。更安能以餘力幾次。顧確信此類之書。於中國前途。大有裨助。夙夜志此不衰。既年欲俟全書卒業。始公諸世。恐更閱數年。殺青無日。不如限以報章。用自鞭策。得寸得尺。聊勝於無「新小説」之出。其發願專為此編也。⁽⁴⁾

（一、わたしはこの書を執筆しようとして、五年の歳月が流れた。振りかえるとついに成し遂げることができなかった。ましていく

つかの仕事を兼ねており、日々寸暇もない。そのうえどうして余力があろうか。だが、この類の書物は中国の前途において、大きな力となるであろうと確信している。日夜、志は衰えておらず、いく年に渡って全ての書物の完成を待ち望んでいる。世に知らしめるのには、恐らく数年かかるであろう。近いうちに著作は完成するが、新聞の制限に関係なく、自らを鞭打つ必要がある。欲望に際限はなく、「新小説」は出版しないよりはましであろう。その願いはこの編を書くことから始まった。）

この諸言より梁啓超は「新中国未来記」を書くために『新小説』創刊したとある。『新小説』を出版することは梁啓超の文学概念を世に知らしめるための場所と言えるだろう。その文学概念を如実に表しているのが、梁啓超が創刊号の冒頭の論説で書いた「論小説與群治之關係（小説と社会の關係を論じる）」である。「欲新一國之民不可不先新一國之小説。（一國の民を新たにしようとするならば、まず一國の小説をあらたにするべきである。）」⁽⁵⁾から始まるこの論説では、小説の効用と重要性について強く述べ、また旧来の小説を批判し、新たな小説の必要性を訴えている。今までにない小説をということで、『新小説』という期刊誌名をつけたのであろう。周知のごとく中国にとって小説とは、決して地位の高いものではなかった。

梁啓超の小説観については、『新小説』の発刊より溯ること 5 年前の 1897 年に『時務報』『蒙學報、演義報合叙』の「序言」に、「西国教科之書最盛，而出以游戏小説者尤夥。故日本之变法，賴俚歌与小説之力。盖以悦童子，以导愚氓，未有善于是者也。（西洋では教科書が最も盛んで、娯楽小説が多く出版されている。故に日本の変法は、民謡と小説の力に頼ったのである。思うに少年を悦ばせ、愚民を導き、未だこれに勝るものはない。）」⁽⁶⁾とあることから、亡命前には小説の効用について着目していることが伺える。その後、

小説の効用が形となるのは、日本へ亡命する船で政治小説「佳人之奇遇」（東海散士著、1885-97、全8篇）を読んだことによる。

ここで清末に、知識人が小説をどのように捉えていたのか。その状況について見てみると、小説の効用の認識は、嚴復（1853-1921）と夏曾佑（1863-1924）が『国聞報』の「本館附印説部縁起」（1897）で、「且聞歐美、東瀛，其開化之時，往往得小説之助。（まさに欧米、日本に聞こえる、その【文明】開化の時には、往々にして小説の助けを得ている。）」⁽⁷⁾と触れている点からも、当時小説は少なからず着目されていた。ただ、この時点で小説の効用を説くも、小説の形はまだ定まっていなかったと考える。その形、つまり小説の効用が発揮できるジャンルとは何かを模索した結果、梁啓超は政治小説に行きついた。当初は日本の政治小説を翻訳するも、その後『新小説』にて「新中国未来記」を執筆することで、政治小説というジャンルは清末において確立したと言えるだろう。『新小説』における梁啓超の文学概念は、小説の地位向上を促し、そして小説を以て社会、政治を変えろという「小説界革命」は知識人たちへと浸透していった。しかし梁啓超のこのような考えは、山田氏の言う「ただ小説のもつ効用に着目してそれを自分たちの政治的理念達成の啓蒙手段に転用しさえすればよかった。」⁽⁸⁾であり、近代的な小説の概念に沿うものではないと言える。

さらに、梁啓超は新たな分野として政治小説を提唱し、それは多くの類似作品を生むことになった。梁啓超の提唱は、小説を政治的、社会的理念達成のための道具とさせてしまったことは否めない。

それでは梁啓超は、小説をどう捉えたのか。小説の価値に着目し、その地位向上を図る上で、梁啓超は『水滸伝』『紅樓夢』と言った中国固有の小説を批判し、これらの小説は諸悪の根源であるとした。そうして人を支配する不可思議な力をもつ小説を改良すべきであるとする。梁啓超の考える小説とは、小説の中に変法維新派の政治理念を描き、啓蒙活動を行うものである。『新小説』の論説におい

ては、小説を理論的に捉えているわけではなかった。『新小説』において梁啓超の放った一本の矢は、中国の近代文学を構築する上で重要であるのに変わりはなく、この後の小説理念に与えた影響、またこれを批判することで小説理念を考えるきっかけを与えた点では重要な文学期刊誌である。ここに起った文学理念が、これ以降どのような形で現われるのか、次に挙げる『繡像小説』から見ていきたい。

2. 2. 『繡像小説』

上述の『新小説』の発刊によって、中国では文学期刊熱が起こった。これに真っ先に反応したのが、『新小説』の創刊より半年後に創刊を迎える『繡像小説』（1903年5月～06年）であろう。

『繡像小説』は、1903年5月に上海で創刊された半月刊である。李伯元を主編に迎え、商務印書館が発行した。1906年に停刊を迎えるまで、全72号を刊行する。

主編を務めた李伯元（1867-1906）は、本名を寶嘉、号を南亭亭長という。ペンネームは、遊戲主人、芋香、二春居士などがある。山東省出身であるが、原籍は江蘇省武進（現、常州市）。1896年、科挙試験を諦めて上海に出ると、『指南報』（1896）『遊戲報』（1897）『世界繁華報』（1901）の創刊に携わる。1903年、商務印書館の依頼によって『繡像小説』の主編となるも、1906年に突然亡くなった。それを機に『繡像小説』は停刊にいたる。

『繡像小説』の第一號に『本館編印繡像小説縁啓』が記載されているが、確認できる資料として、阿英の『晚清文芸報刊述略』によった。以下がその内容である。ここから『繡像小説』の発刊理由と理念を見ていく。

欧美化民，多有小説；搏桑崛起，推波助瀾。其从事于此者，率皆名公鉅卿，魁儒碩彥。察天下之大勢，洞人类之頤理，潛推往古，

豫揣將來。然後抒一己之見，著而為書，以醒齊民之耳目。或對人群之積弊而下砭，或為國家之危險而立鑑。揆其立意，无一非裨國利民。支那建國最古，作者如林，然非怪謬荒誕之言，既記污穢邪淫之事，求其稍裨于國，稍利于民者，几几乎百不獲一。夫今樂忘倦，人情皆同，說書唱歌，感化尤易。本館有鑑于此，于是糾合同志，首輯此編。……⁽⁹⁾

（欧米が民を変化させたのは、多く小説があった。日本は決起し、波乱を大きくした。これに携わったものは、おおそよみな名声ある高官、大学者であった。天下の大勢をつぶさに見ると、人類の道理を養い、潜在的にいにしえを推し広め、あらかじめ未来への推量を見通し、そして自己の見解を表現し、本として著し、民の耳目を覚醒させるのだ。あるいは人々の積年の弊害にたいして治療を下し、あるいは国家の危機の為に戒め、その決意を推しはかることは、ひとつとして国に役立ち民に益しないものはない。支那は建国が最も古く、作者は林の如く現われたが、怪異奇談の話でなければ、汚らわしく淫らな話を記している。いささか国に役立ち、民に利するものを探し求めるが、およそ百に一つもない。そもそも楽しければ疲れをしらないのは、人情としてはみな同じで、説書唱歌（講談を語り、歌を歌う）は、とりわけよい影響を与えやすい。本館はこの点を考慮に入れ、そこで同志をかき集め、この雑誌を創刊したのである。……）

『繡像小説』は、上述に「ヨーロッパ、アメリカは民の教化に多く小説があった。」と例をあげているように、発刊の理由は小説を用いて民を教化することを目的としている。そして小説によって民の耳目を目覚めさせることで長年の風習による弊害を改め、国家の危機を戒めようとした。このように小説を持ち上げる一方で、旧小説に対しては、国に役立ち、民に利する小説はほとんど得られないとしている。小説は国や民に役立たなければいけないという趣旨が伺

える。これに見える『繡像小説』の発行理由及び理念は『新小説』とほぼ同じである。違いが見えるのは、掲載された小説からである。

『繡像小説』の小説数は 36 作品ある。掲載された小説の大半は清末の社会を反映させ、政治の闇を暴いた作品であった。代表作に『文明小史』（李伯元）、『活地獄』（李伯元、40 回～42 回は吳趼人が代筆）、『老殘遊記』（劉鶚、13 回まで掲載）などがある。この他、科学小説『生生袋』、探偵小説『華生包探案』などの翻訳作品も毎号掲載していた。そして全 72 號のうち、論説は第三號の「小説原理」、別士（著）のみである。この論説を著した別士とは、夏曾佑のペンネームである。

夏曾佑（1863.11-1924.4.17）は、字を穗卿、号を碎佛、筆名を別士、蕙卿という。浙江省杭州の出身である。清末変法維新派の啓蒙家、史学家、官僚。1890 年進士となり、礼部主事に任ぜられた。この頃より梁啓超、譚嗣同と意気投合する。1896 年には知県候補となり、梁啓超らの『時務報』創刊を助け、さらに梁啓超、譚嗣同と共に旧詩の改革を提唱して、詩界革命を主導した。1897 年、嚴復らと『國聞報』の創刊に携わり、主編を務めた。1902 年ごろ、母の喪に服するために離職。1905 年に復職する。「小説原理」の掲載は 1903 年であるので、母の喪に服して離職していた時期にあたる。

さて「小説原理」では、紙上において読者が遊びとしているもの、その楽しさに甲乙をつけている。まず絵を見るのが最も楽しいことだとし、次いで小説、史、科学書と続き、最も苦痛なのは経文を読むことだとする。ここにおいて人々の楽しみとして小説は二番手としているものの、小説は絵で描ききれない世界を書くことができる。さらに小説には“五難”というものがあり、作家たる者はこの五難を知らなければならないとしている。ここでいう五難とは何か。初めに「一寫小人易君子難（一、小人は描きやすいが君子は難しい）」をあげ、つづいて「二寫小事易大事難（二、小さな事は

描きやすいが大きな事は難しい)」「三寫貧賤易富貴難(三、貧賤は描きやすいが富貴は難しい)」「四寫實事易寫假事難(四、事實は描きやすいが虚構は難しい)」「五敘實事易敘議論難(五、事實は語りやすいが議論するのは難しい)」と小説の易しい点と難しい点を上げる。またそれぞれ小説を創作するには基礎が必要だとし、生活基盤や経験がないものを描くことは難しいとある。小説の難しさなどが書かれているが、実際にどのようにして小説を書くかという点や書き方の例といった類のものは見られない。ここでは、大まかな道筋を述べるに留まっている。大まかな道筋を述べているとしたが、それが実際に役立つかは疑問である。そしてここでもまた、旧来の小説への批判がみられた。

さて、「小説原理」の後半に見られる特色としては読者の二極化があげられる。

綜而觀之，中國人之思想嗜好，本爲二派，一則學士大夫一則婦女與粗人。故中國之小說，亦分二派，一以應學士大夫之用，一以應婦女與粗人之用，體裁各異而原理則同。今值學界展寬(注西學流入)，士夫正日不暇給之時，不必再以小說耗其目力，惟婦女與粗人無書可讀，欲求輸入文化，除小說更無他途，其窮鄉僻壤之酬神演劇北方之打鼓書，江南之唱文書，均與小說同科者。先使小說改良，而後此諸物一例均改，必使深閨之戲謔，勞侶之耶禺，均與作者心入而俱化，而後有婦人以爲男子之後勁，有苦力者以助士君子之實力。而不撥亂世致太平者無是理也。至於小說與社會之關繫諸賢言之詳矣。⁽¹⁰⁾

(まとめてこれを見ると、中国人の思想・嗜好はもともと二派をなしていて、一つは読書人であり、もう一つは婦女と無学な人である。それゆえ中国の小説もまた読書人に応じたものと婦女と無学な人に応じたものの二派に分かれている。様式はそれぞれ異なるが、原理は同じである。いま、教育界の価値は広がり(注：洋

学の流入)が、読書人は終日暇がなく、さらに小説で目を消耗させるには及ばない。ただ婦女と無学な人は、読むべき本がなく、文化を受け入れようにも、小説を除いて他に方法がない。辺鄙な片田舎の神に捧げる演劇として、北方の打鼓書(語り物の一種)、江南の唱文書(語り物と歌の演芸)は、いずれも小説と同等である。まず小説を改良して、その後にこれら諸物を同様に改める。婦女の冗談や労働者の愚痴をして、等しく作者の心に入り具体化すれば、しかる後、婦女は男子の力となり、労働者は上流社会の人の助ける力となるだろう。また乱世を治めずして世の中が太平となる道理がないのだ。小説と社会の関係についてはもろもろの善言を詳しく述べた。)

『繡像小説』の論説「小説原理」では、上述のように小説は婦女や無学な人が読むものであり、彼らに知識を得させるために、小説を改良するという考えがみられる。「小説原理」を著した夏曾佑は、梁啓超と交友を持っており、おそらく梁啓超に触発されてこの論説を書いたと思われる。もともと、夏曾佑は小説の価値は認めていた。しかし小説は知識人が読むものというより、それ以外の無学な人々が読むという意識が強い。無学な人々にどのようにして教養をつけさせるか。それを彼らが親しむ小説でなそうとしている。

上述で述べた『本館編印繡像小説緣啓』及びこの論説から見ると、『繡像小説』は、長年の悪習を取り除き、民の耳目を覚醒させることを目的意識とし、小説をつかって民(ここでいう民とは、夏曾佑の言う婦女及び無学な人を主に指すのだろう)を教育しようとした文学期刊誌である。

当時『繡像小説』が社会に与えた影響について、包天笑(1876-1973)は、後に「虽然商务印书馆出版、李伯元编辑的《绣像小说》还在其先，但在文艺社会上，没有多大影响。《新小说》出版了，引起了知识界的兴味，哄动一时，而且销数亦非常发达。(商

務印書館出版、李伯元編集による『繡像小説』は先頭を切ったけれども、文芸界では、それほど大きな影響は与えなかった。『新小説』の出版は、知識人の興味を引き起こし、一大センセーション巻き起こし、さらに売上もまた盛んであった。）」⁽¹¹⁾と述べている。『時報』にて編集に携わり始めた包天笑の目には、『繡像小説』が与えた影響はあまり大きくないように映ったようである。

しかし、魯迅は『中国小説史略』にて四大譴責小説の一つに劉鶚の『老殘遊記』を挙げ、阿英は『晚清小説史』においては晚清小説の代表作の一つに李伯元の『文明小史』を挙げた。当時は、影響が大きくなかったとされる『繡像小説』であるが、掲載された小説は、民国期において晚清を語る上で重要視されることを見ると、後に与えた影響は少なくないであろう。

『新小説』によって引き起こされた文学期刊誌への高まり、それに乗じて発刊された『繡像小説』の理念は、多く『新小説』によるものであった。掲載された作品には、政治小説や科学小説も見られるが、大半を占めたのは現実の社会を反映した政治批判、官僚世界を暴露するという類のものであり、それらは儒林外史の手法を引き継ぐものであった。また唯一の論説である「小説原理」では、小説の創作とは生活を基盤として書くべきであると創作に触れるが、文体や構成などには触れていない。そして依然として小説は婦女や無学な人が読むものという考えであった。しかしここに矛盾が生じる。当時中国の識字率は低かった。読み書きができるのは全体からすると一部の人だけである。論説で述べるような婦女や無学な人はそもそも小説を読めないのである。夏曾佑の述べる二極化は文字を読めることを前提とする理想論であり、その根本にある識字をどうすべきかということには触れていない。庶民の娯楽である、小説や講談などを改良すれば教育に繋がるという考えからは、理念のみが先行していると感じられる。

2. 3. 『月月小説』

『月月小説』は、1906年11月に上海で創刊された月刊誌である。1909年1月に停刊を迎えるまで、全24号を刊行する。

第一号～三號の編集兼発行者・印刷者は汪惟父。第四号～八号の編集者は吳趼人と記載されるも、印刷兼発行者は汪惟父のままである。第九号～二四号の編集者は許伏民、印刷兼発行者は沈濟宣に変わる。発行所は、第一号～第八号は月月小説社とあるが、第九号～第二十四號号は群学社図書とある。

『月月小説』は汪惟父が「風俗の改良」を企画して発刊を準備した文学期刊誌であり、その著述主編として吳趼人、周桂笙⁽¹²⁾が迎え入れられた。後に編集者及び発行所が変更するも、引き続き作品の選択及び小説の執筆は吳趼人と周桂笙が行っていることから、『月月小説』はこの二人の影響下にあった文学期刊誌と言える。

吳趼人（1866-1910）は、本名を沃堯、字を小允、趼人、筆名を我仏山人、検塵子などという。北京出身であるが、原籍は広東省南海県仏山鎮である。清末の小説家。25歳頃に上海に出て、江南機器製造総局翻訳館に筆耕として就職した。1902年、梁啓超の「論小説与群治之關係」より感銘を受け、1903年、『新小説』にて宋末の亡国の歴史に材を取った小説「痛史」を連載し始める。これは吳趼人の処女作にあたる。その後も『新小説』にて「二十年目目睹之怪現状」「九命奇冤」などを発表した。上海に移って以降の『新小説』の掲載作品にその名を多く残すことより、梁啓超が抜けた以後の『新小説』の重要人物と言えるが、ここでは『月月小説』における吳趼人の思想・理念を中心に見ていく。

「月月小説序」、吳趼人（著）

吾感夫飲冰子『小説與羣治之關繫』之說出提倡改良小説，不數年而吾國之新著、新譯之小説，幾於汗萬牛充萬棟，猶復日出不已，

而未有窮期也。……

今夫汗萬牛充萬棟之新著、新譯之小說，其能體關繫羣治之意者。吾不敢謂必無然，而怪誕支離之著作，詰曲聱牙之譯本。吾蓋數見不鮮矣。凡如是者，他人讀之不知謂之何，以吾觀之，殊未足以動吾之感情也。於所謂羣治之關繫杳乎。其不相涉也。然而彼且囁囁，然自鳴曰，吾將改良社會也。吾將佐羣治之進化也。隨聲附和，而自忘其真，抑何可笑也。⁽¹³⁾

（私は思うにかの飲冰子が『小説と群治の關係』で小説の改良を提唱したことで、数年せずして、我が国の新著、新訳の小説は、おびただしい数となり、なお来る日も来る日も出版し、やむことはない。……

いまそのおびただしい数となった新著、新訳の小説は、群治の考えを體現しているのだろうか。私は、必ずしもその通りだと言いきれないのは、支離滅裂な著作や文章が硬く難読な訳本がある。度々見ているので珍しくはない。およそこのようなものは、他人が読んでも何を言いたいのかかわからないだろう。これを見るに、特に感情を動かすには至らない。群治の關係は影も形も見えないのである。それは互いに関わり合っていない。けれども、それはさらに騒がしく、自分はまさに社会を改良し、群治の進化を助けているのだという。人の尻馬に乗るばかりで、その真実を忘れることは、なんともばかばかしいことだ。）

吳趸人の著した「月月小説序」には、『新小説』や『繡像小説』と同じく小説には力があるとする考えであった。しかし一方、梁啓超の「論小説与群治之關係」（『新小説』第1号、1902）を取り上げ、当時の小説に対する批判が見られる。梁啓超の理念に付和雷同するも、全くその理念が伝えられていない著作の氾濫は、吳趸人に

危機感をもたらしたのであろう。

そして行きついたのが、新しい知識を小説の面白さの中に暗喩するという考えである。吳趼人は、道德が失われた昨今、その軽薄な風俗を立て直すには小説から始めるとする。実際『月月小説』では、道德を浸透させることを目的とした作品を多く掲載している。また文学期刊誌の特色としては多数の小説ジャンルを掲載したことである。『新小説』『繡像小説』に比べるとジャンルの多さは特に目立つ点である。また作品数については、『繡像小説』全 72 期で 34 作品に対し、『月月小説』は全 24 号で 114 作品ある。半月刊と月刊という違いはあるけれど、その差は大きいだろう。これほどの差が開いた要因としては、『月月小説』では短篇小説を多く掲載したことによる。

『月月小説』の第一號をみると掲載された小説は、歴史小説・虚無党⁽¹⁴⁾小説・歴史小説（翻訳）・理想小説・社会小説・偵探小説・俠情小説・偵探小説（翻訳）・国民小説・社会小説・写情小説・滑稽小説・短篇小説と 13 種類にのぼる。このジャンルの多さは終始一貫した傾向であった。また小説の他に傳奇、割記小説、雜録、俏皮話、論説、小説紹介なども多く掲載されている。

様々な分野の小説を掲載しているという点については、第十三號の論説「論看月月小説的益處」を見てみたい。この論説では読者層を六種類に分類している。「官場中應看」（官界は必ず見るべきである）、「維新黨應看」（維新党は必ず見るべきである）、「歴史家應看」（歴史家は必ず見るべきである）、「實業家應看」（実業家は必ず見るべきである）、「詞章家應看」（文章家は必ず見るべきである）、「婦女們應看」（婦女たちは必ず見るべきである）以上の六つに分けている。各項目では、その読者層に符合する作品を列挙し、『月月小説』の小説の分野が幅広いのは、広範囲の読者層を対象としているからだとある。この六分類を見ると、六つ目に挙げている婦女以外は、全て知識層に訴えたものである。また、「這

『月月小説』不獨能消消閒，只怕還長得許多見識，學得許多好樣呢。

（この『月月小説』は、ただ暇つぶしにあるのではなく、見識を広め、素晴らしいものを学んでもらうことができる）」の一文を見るに、小説の地位が高められたといえども、それはあくまで小説の効能が知られたということで実際には、小説を暇つぶしとする考えは改められていないのが伺える。

この論説では読者層を分類する他に、文体の記載が少しされている。記載されていると言っても、外国小説は文言を用いて記事体で書いていると触れるのみで、文言・白話の論争はこの時点ではまだ見られない。

『月月小説』では、様々な分野の小説を描くことで、多方面に渡って吳趸人の唱える道徳を浸透させようとした。彼らが浸透させようとした道徳観が、どれほど浸透したかはまだわからない。ただ今回分かりえたものは、『月月小説』が『新小説』や『繡像小説』と比べて、幅広い読者層を意識したことにおいて多様な小説ジャンルを設けた文学期刊誌という点である。この『月月小説』で掲載された多様な小説ジャンル、例えば、吳趸人が女性の道徳観を描くために「写情小説」という小説ジャンルを作るが、これは後に「言情小説」と同義語となり、恋愛小説として受け継がれることになる。このジャンルは民国初期に現われる作家群の一つである鴛鴦蝴蝶派によって発展されていくが、それは吳趸人の意図した道徳的な小説とは違う形であった。

この節で挙げた『新小説』『繡像小説』『月月小説』は、ともに小説とは政治、教育、道徳などを浸透させるための手段であった。それが手段ではなく、小説についてどう考えるか、それが見られるのが次節であげる『小説林』である。

3. 小説の“実質”への流れ『小説林』

『小説林』は、1907年2月に上海で創刊された月刊誌である。1908

年 10 月に停刊を迎えるまで全 12 期を刊行する。

主編は、黄人。訳述編集は、徐念慈。編集者は、小説林総編輯所。発行所は、小説林宏文館有限合資會社。

主編を務めた黄人（1866-1913）は、本名を黄振元、字を羨涵又は摩西。江蘇省常熟出身。清末の作家、批評家。1901 年、章太炎と共に蘇州東吳大学に招かれる。同大学にて文学教授を務める。

訳述編集を務めた徐念慈（1874？75？-1908）は、本名を蒸父、字を彦士、別号を覺我、または東海覺我とする。江蘇省常熟出身。英語と日本語に通じる。清末の翻訳家。

「小説林発刊詞⁽¹⁵⁾」、摩西（著）

則雖謂吾國今日之文明爲小説之文明，可也。則雖謂吾國異日政界、學界、教育界、實業界之文明即今日小説界之文明亦無不可也。雖然有一蔽焉，則以昔之視小説也太輕，而今之視小説又太重也。……然吾不問小説之效力，果足改頑固腦機而靈之，祛腐敗空氣而新之否也。亦不問作小説者之本心，果專爲大羣致公益，而非爲小己謀私利，其小説之內容，果一一與標置者相譬否也。……請一考小説之實質。小説者，文學之傾于美的方面之一種也。⁽¹⁶⁾

（わが国の今日の文明は、小説のための文明と言えるだろう。わが国の他日の政界、学界、教育界、実業界の文明は即ち今日の小説界の文明もまたそういつて差支えないだろう。昔は小説を軽んじていたが、いまでは小説を重んじ過ぎている。……しかしながら、私は小説の力を問うたことがない、果たして頑迷な頭と精神を改め、腐敗した空気を取り除き新たにするのに十分であるだろうか。また、小説を書く者の本心を問わなくて、果たして大衆の公益となるのか、一個人の利益をなすのではなく、その小説の内容は、ひとつひとつ値段に一致するかどうか。……どうぞ小説の実質を考えて下さい。小説なる者は、文学が美の方面に傾いたものである。）

「小説林発刊詞」は、主編を務める黄人による論説である。ここで黄人は、現在の小説の風潮として、価値を重く見過ぎていると述べている。これまで上述の三誌では、小説の価値を訴えてきた。しかし『小説林』は、小説が国家の法典や宗教の聖書などに取って代わるものではないとし、これまでの小説の高まりを批判すると共に、小説の“実質”について述べるようになる。そして小説とは、美的方面に傾斜した文学の一種だとした。この発刊辞を見る限り、上述の三誌の発刊意図とは一線を画すものとなっている。また黄人の著した「小説林発刊詞」では、当時の人気を博した翻訳小説の登場人物の名⁽¹⁷⁾がたびたび見られる。これも他の期刊誌には見られない傾向である。小説の“実質”については、次の「小説林縁起」でその詳細が見られる。

「小説林縁起」、東海覺我（著）

抑小説之道，今昔不同，前足之果以害人，後之實無愧益世耶。豈人心之嗜好，因時因地而遷耶。抑於吾人之理性 *Venunft*⁽¹⁸⁾，果有鼓舞與感覺之價值者耶。是今日小說界所宜研究之一問題也。余不敏，嘗以臆見論斷之，則所謂小說者，殆合理想美學、感情美學而居其最上乘者乎。試以美學最發達之德意志徵之。黑爾爾氏 *Hegel*，1770—1831 於美學，持絕對觀念論者也。其言曰：藝術之圓滿者，其第一義爲醇化於自然。簡言之，即滿足吾人之美的慾望，而使無遺憾也。… …⁽¹⁹⁾

（そもそも小説の道は、今と昔は同じでなく、前者は人を害し、後者は世に有益であることに恥じない。まさか人心の道楽は、その時その土地の移り変わりのはずではあるまい。それとも我々の理性 *Venunft* において、果たして鼓舞と感覺の意味はあるか。今日の小説界で研究問題の一つとすべきであろう。不肖私は、かつて主観的な見解を持ってこれを論断し、小説というものは、おお

よそ理想美学、感情美学を合わせて、その最上を占めている。試みに、美学が最も発達したドイツでこれを証明しよう。ヘーゲル（Hegel, 1770-1831）は美学において、絶対観念論を持っていた。その言うところは「芸術の完全たるは、その第一義に自然を純化することだ。」である。簡単に言えば、我々の美の欲望を満足させ、遺憾無くすることだ。……）

「小説林縁起」では、ヘーゲルの美学をあげて小説について述べている。美学という言葉は、今回あげた文学期刊誌の中で『小説林』のみに見られる。またヘーゲルと共に挙げ、感情美学の代表者として紹介されるのがキルヒマン⁽²⁰⁾（1802-1884）である。キルヒマンは法律家として当時名を馳せた人物で、哲学者という一面も持ち合わせているが現在ではあまり知られていない。では、なぜキルヒマンを紹介しているのか。「小説林縁起」を著した東海覺我こと、徐念慈は日本語に通じていたとある。当時の日本では東京大学などにて美学の講義が行われ、1900年には東京大学で大塚保（1869-1931）による美学講座が設けられていた。徐念慈の美学の思想はこの当時の日本から得た知識であると考えられる。そしてキルヒマンについては、1899年に帝国百科全書『哲学汎論』（フォン・キルヒマン著、藤井健治郎⁽²¹⁾訳）が博文館より発行されており、徐念慈はこれを読んだ可能性が高いだろう。この中では美学について述べている章があることから、徐念慈はキルヒマンを美学の代表としたのであろう。つまり「小説林縁起」に見られる美学の概念は、日本からの影響であった。

「小説林縁起」はヘーゲル、キルヒマンの美学を受けて、小説とは作家自身の思想や感情を具体化することや人物描写の幅を広めるといったことを述べている。また人物描写について、清末小説の典型となった英雄と悪人の図式に異を唱え、西洋の小説のように人物に幅をもたせて描くべきとした。このように人物描写について述

べることは、『新小説』『繡像小説』『月月小説』では見られなかった傾向である。

『小説林』の小説の概念には、日本における西洋美学の受容を『小説林』が受けたと言えるだろう。また『小説林』では、包天笑、徐卓呆、李涵秋など後に鴛鴦蝴蝶派の代表する作家達が見られる。もう一方で『小説林』の画期的な点は、原稿料規定を初めて設けた文学期刊誌ということである。『小説林』と同年に、新聞紙『時報』⁽²²⁾では小説の募集において懸賞金を設けた。これは小説の需要に編集者だけの執筆では間に合わないという状況が生まれたからであり、これにより職業作家が誕生する。これらの点から、『小説林』は後の趣味性や職業作家輩出する文学期刊誌への分岐点となる期刊誌ではないかと考える。

『小説林』は、『新小説』より起った小説を手段としてではなく、小説の“実質”について考察し、美学の思想を取り入れたことは、『新小説』『繡像小説』『月月小説』では見られない現象であった。ここに至ってようやく小説そのものについて捉え出したと考える。ただ美学を唱えながらも、実際それを掲載作品に反映させることは難しく、『小説林』の作品の多くは従来作品から大きく離れるものではなく、思想的には革命派の色合いが強くでた文学期刊誌であった。この時点でもまだ小説の理念のみが先行し実質が伴っていない。

4. おわりに

本稿では、清末の主要な文学期刊誌の発刊詞を見てきた。文学期刊誌の発刊詞を見ることは、当時の文学概念の流れを見ることに繋がるのではないかと考えたからである。そして、この文学概念の流れを見ることによって、民国以後の鴛鴦蝴蝶派の文学概念の前に、清末にどのような文学概念が起り、それはどのような流れを見せるのかを整理をしたかったからである。今回、知りえたことと同時に新

たな課題も出てきた。

清末に起った小説の価値の認識、即ち梁啓超が投じた一石は、小説の名を借りて、政治理念を啓蒙しようとするものであったが、その波紋は様々な形となり清末の小説に影響を与えていった。清末の知識人にとって小説とは一体何であったのだろうか。『新小説』『繡像小説』『月月小説』では、それぞれの目的を達成するための道具という役割であったとしても、小説を創作したことには変わりはないだろう。『繡像小説』では、挿絵を取り入れた小説を掲載し、『月月小説』では、幅広い分野の小説を提供した。

『小説林』に至って、美学という概念を受容して小説に用いようとした。その理念は新しいものであったが、作品に反映させるには至らなかった。このように清末に起った流れは知識人たちの揺れ動きが見られ、小説に対する認識の曖昧さが際立つ結果となった。『小説林』では、職業作家の誕生が起る。これが後の小説の大衆化へどう繋がるのか。また西洋や日本からの影響をどう受容していくのか。これらを研究することで、当時小説が中国でどのように捉えられていたのかを考えていきたい。

〈参考文献〉

阿英『晚清小説史』商務印書館、1937年5月

阿英『晚清小説史』台湾商務印書館、2004年4月

陈荒煤主編『鴛鴦蝴蝶派文学资料』福建人民出版社、1984年

范伯群主編『中国近现代通俗文学史』（上・下）、江苏教育出版社、1999年

魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』台湾商務印書館、1992年

中島利郎『晚清小説研叢』汲古書院、1997年7月

山田敬三「『新中国未来記』をめぐって ―梁啓超における革命と変革の論理―」、狭間直樹編『共同研究 梁啓超 ―西洋近代思想受容と明治

日本一』みすず書房、1999年10月

〈注釈〉

- (1) 阿英『晚清小説史』、商務印書館、1937年5月、P2-3。
- (2) 同(1)、P9。
- (3) 同(1)、P10。
- (4) 『新小説』、影印本、上海書店、1980年12月。第一號、「新中國未來記」。
- (5) 『新小説』、影印本、上海書店、1980年12月。
- (6) 『梁启超全集』張品興主編、北京出版社、1997年7月。第一卷 P131。
- (7) 張靜廬輯註『中國出版史料』中華書局、1957年5月、P104。
- (8) 山田敬三「『新中国未來記』をめぐって—梁啓超における革命と変革の論理—」『共同研究 梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本—』みすず書房、1999年10月、P340。
- (9) 阿英『晚清文藝報刊述略』、古典文学出版社、1958年3月、P17。
- (10) 『繡像小説』、復刻版、上海書局、1980年12月。第三號。
- (11) 包天笑『訓影樓回忆录』山西古籍出版社、1999年9月、P457。
- (12) 周桂笙（1873-1936、1863-1926）は、本名を樹奎、筆名を新庵、知新室主人などという。上海南匯出身。清末の翻訳家、小説家。幼年の頃、広方言館に入り、後に中法学堂に入った。フランス語と英語を学ぶ。吳趼人と同じく『新小説』にて小説（翻訳小説）を掲載する。汪惟父の招聘を受けて、『月月小説』にて翻訳小説を担当した。
- (13) 『月月小説』復刻版全8巻、龍溪書舎、1977年9月。
- (14) 虚無党とは、帝政ロシア時代、チエルヌイシェフスキーを指導者とする革命的民主主義者の党を指す。
- (15) 目次では「小説林発刊辭」。
- (16) 『小説林』、影印本、上海書店、1980年12月。
- (17) 「狹斜拋心締約，輒神遊於亞猛、亨利之間；屠沽察睫競才，常銳身以福爾馬丁爲任。」林紓訳の『巴黎茶花女遺事』の亞猛と『迦茵小傳』

の亨利を指すと考える。

(18) “Vernunft” の誤り。

(19) 同(16)。

(20) ユリウス・ヘルマン・フォン・キルヒマン (Julius Hermann von Kirchmann、1802-1884)、ドイツの法律家、政治家、哲学者。

(21) 藤井健治郎 (1872-1931)、倫理学者。

(22) 1904年6月～1939年9月。上海にて創刊。『時報』は新聞紙面において小説欄を初めて設ける。編集者は、羅普、陳景韓、包天笑など。